

校歌で“観光”する“郷土”の風景

Regional Sightseeing Based on School Songs

谷本 研

TANIMOTO Ken

校歌で“観光”する“郷土”の風景

Regional Sightseeing Based on School Songs

谷本 研
TANIMOTO Ken

助教（美術、デザイン、漫画）

From 2021 to 2022, I participated in art festivals held in two remote areas of Japan. In both areas, far from urban areas, many elementary schools have closed due to the declining birthrate. “Yanbaru Art Festival 2021-2022” and “Otsuki Contemporary Art 2022” were both held at closed schools.

I researched all the closed elementary schools in the surrounding area and used their school songs as motifs. In this paper, I will introduce the two works I exhibited in the festivals and describe the charm of the region from the standpoint of a “tourist” led by the gaze of the hometown in the school songs.

1. はじめに

2021年から2022年にかけて、私は日本の2つの辺縁地域で開かれたアートフェスティバルに参加した。それらの開催地は沖縄県北部のやんばる地方と高知県南西部の大月町である。都市から離れた沿岸部に位置する両地域は、少子化によって就学人口が減少し、多くの小学校が廃校になっている。今回私が参加した「やんばるアートフェスティバル2021-2022」と「大月コンテンポラリーアート2022」は、ともに廃校になった小学校をメイン会場として開催された。

これらのフェスティバルへ参加するにあたり、私は会場である小学校だけでなく、周辺地域の全ての廃校小学校を対象にリサーチし、それぞれの校歌をモチーフとした作品を制作した。本稿では、両作品について記録するとともに、校歌に織り込まれた“郷土”へのまなざしに導かれながら、“観光客”的な立ち位置で地域の魅力に触れる醍醐味について記述する。

2. 現状と背景

リサーチを通じて実感したのが、廃校数の多さである。文部科学省の発表では、2002年度から2020年度に発生した全国の廃校小学校が5,678校で、平均すると1年に約300校ずつ閉校している計算になる〔註1〕。そして現地でのリサーチを通じて、2022年時点でやんばる地方の^{おおきみそん}大宜味村・^{にくがみそん}国頭村をあわせて8校、大月町で14校の小学校が廃校になっていることが分かった。そして両地域では、そ

れぞれ統廃合により新しい小学校が誕生している（大宜味村立大宜味小学校（平成28年開校）、大月町立大月小学校（平成21年開校））。廃校のうち一部は福祉施設や文化施設として活用されたり、民間事業者に貸し出されたりしているが、多くは閉校以来ほとんど手付かずのままの校舎が置き去りにされていた。廃校をどう有効活用するかは、地域活性化に向けた取り組みとして、地方自治体にとっての大きな課題となっている。その一助にアートが駆り出されているのが現状といえる。

ところでアートフェスティバルといえば、「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」を筆頭に、2000年前後から日本各地で地域アートが流行し、地方の活性化に大きな影響を生み出したことが公知のものとなって久しい。その反面で、元来自立性を有していたアートが、一過的な観光地化の手段として消費されることを問題視する向きもある。こういった背景に対して、発表の機会を欲するアーティストのひとりとして無自覚にいることはできない。各地のフェスティバルに参加するつど、自己の立ち位置を再確認する必要性を強く感じている。

3. なぜ校歌をモチーフとするか

今回私は、それぞれの主催者からの出展依頼を受けるにあたり、サイト・スペシフィックな作品を目指して、校歌をモチーフにしようと考えた。両フェスティバルともに、会場が廃校であったことが、その一番のきっかけであるが、理由はそれだけではない。校歌は全国津々浦々にあって、必ず郷土の風景がうたわれているという構造に注目したのである。

というのも私は、これまでの自身のアート活動の中で、“観光”という概念を通底するモチーフとしてきた。その発端は、1999年に京都の古旅館を舞台として企画した展覧会にある〔註2〕。また同時期からはじめた「ペナント・ジャパン」というプロジェクトでは、かつて全国各地で土産物として流行し、近年姿を消してしまった「観光ペナント」を収集・研究したり展示したりしてきた〔註3〕。

ところで、観光ペナントは細長い二等辺三角形の中に、土地の名称とともに風景が描かれているのが定型となっている。それに対して校歌は、16小節程度のコンパクトなメロディに郷土の風景が歌詞としてうたわれることがフォーマット化している。その在り方から、校歌というものに観光ペナントに通じる構造を読み取ったのである。

もちろん校歌は、観光客のような他者の視点ではなく、それぞれの郷土で育った土着の人々の視点に立って作られている。観光ペナントが遠方の他所へ行ったことを自慢するための存在だったのに対して、校歌は地元民がその足元である故郷の風景を誇り、高らかに

うたうものである。言い換えれば、前者が“到達した場所”を誇示するものであり、後者が“居住する場所”を顕示するものであるという意味において、その構造は似ているといえる。

そして、フェスティバルの参加アーティストとして自分がはじめてそれぞれの場所へ訪れるにあたり、“観光”という態度を積極的に捉えようと考えた。本来、そこに属する者がうたうことを前提として作られた校歌を読み解くことから、他所者たる私が、いわゆる“観光名所”に限らない地元民が誇る郷土イメージに触れることができるのではないかと考えた。そして特に、廃校となって消えゆくとする数々の校歌を掘り出すことで、草の根のまなざしを再発見しようと試みたのである。

4. 具体的内容

4.1 作品の概要

2021年から2022年に2つの地域でおこなったりサーチと作品発表の概要は次のとおりである。

「やんばるアートフェスティバル 2021-2022」（メイン会場：大宜味村立旧塩屋小学校）

作品名：《やんばる旧小学校々歌八景》

フィールドワーク：2021年9月15～17日

展覧会：2021年12月18日～2022年1月16日

リサーチ対象：8校（津波小学校、塩屋小学校、旧大宜味小学校、喜如嘉小学校、佐手小学校、同・辺野喜分校、北国小学校、楚洲小学校）

リサーチ協力：大宜味村教育委員会、国頭村役場企画商工観光課

- ・村役場や教育委員会の方々の協力のもとに入手した8校の校歌の歌詞を読み解きながら、8校全ての学区を巡るフィールドワークをおこなった。
- ・フィールドワークに基づいた鳥瞰図を描き、幅約8m×高さ約6mの巨大な幕として、旧塩屋小学校体育館の舞台に設置した [図1] [図2]。
- ・入手した楽譜をもとに作成した8つのオルゴールを、学校で使用されていた机の上にそれぞれ設置し、鑑賞者がハンドルを回してメロディを聴くことができるようにした [図3] [図4]。
- ・8校の校歌にうたわれた風景を“八景”と捉えて解説したガイドマップを会場で配布した [図5]。



図1 谷本 研《やんばる旧小学校々歌八景》(鳥瞰図)
 トロマット／縦610 cm×横808 cm／2021年／個人蔵／撮影者：筆者



図2 谷本 研《やんばる旧小学校々歌八景》(鳥瞰図、アップ)



図3 谷本 研《やんばる旧小学校々歌八景》(オルゴール)
 オルゴール／15 cm×7 cm×3 cm
 (本体部分)／2021年／個人蔵／
 撮影者：筆者



図4 谷本 研《やんばる旧小学校々歌八景》(オルゴール)



図5 谷本 研《やんばる旧小学校々歌八景》(ガイドマップ)
マットコート紙 / B3
(364 cm×515 cm) マップ折り /
2021年 / 個人蔵

「大月コンテンポラリーアート 2022」(メイン会場：大月町立旧小才角小学校)

作品名：《大月町旧小学校校歌十四窓 — 廃校オルゴール —》

フィールドワーク：2022年6月9・10日

展覧会：2022年9月18日～10月1日

リサーチ対象：14校 (小才角小学校、月灘小学校、姫ノ井小学校、竜ヶ迫小学校、芳の沢小学校、弘見小学校、周防形小学校、櫻西小学校、一切小学校、柏島小学校、安満地小学校、橘浦小学校、春遠小学校、中央小学校)

リサーチ協力：大月町役場まちづくり推進課、大月町地域おこし協力隊

- ・村役場や地域おこし協力隊コーディネーターの方々の協力のもとに入手した14校の校歌の歌詞を読み解きながら、14校全ての学区と校舎内を巡るフィールドワークをおこなった。
- ・旧小才角小学校体育館の14枚の窓に、14校それぞれの校歌の歌詞を印刷したカーテンを設置した [図6] [図7]。
- ・入手した楽譜をもとに作成した14個のオルゴールを、同じく出品アーティストである野口ちとせ氏による鉛筆をイメージしたオブジェに取り付け、鑑賞者がハンドルを回してメロディを聴くことができるようにした [図8]。
- ・14校それぞれのノートを作り、木の机の上に解説とともに設置。鑑賞者が自由に思い出などを書き込めるようにした [図9]。

- ・14校の校歌にうたわれた風景を“十四窓”として解説した印刷物を会場で配布した。



図6 谷本 研《大月町旧小学校校歌十四窓 一 廃校オルゴールー》
 ミクストメディア（オルゴール、ポンジクロスなど）、インスタレーション／サイズ可変／2022年／大月町役場蔵／撮影者：筆者
 野口ちとせ《マララの鉛筆・ヘキサゴン》シナ合板、水性塗料、ニス／2022年／大月町役場蔵／撮影者：筆者



図7 谷本 研《大月町旧小学校校歌十四窓 一 廃校オルゴールー》
 (カーテン)

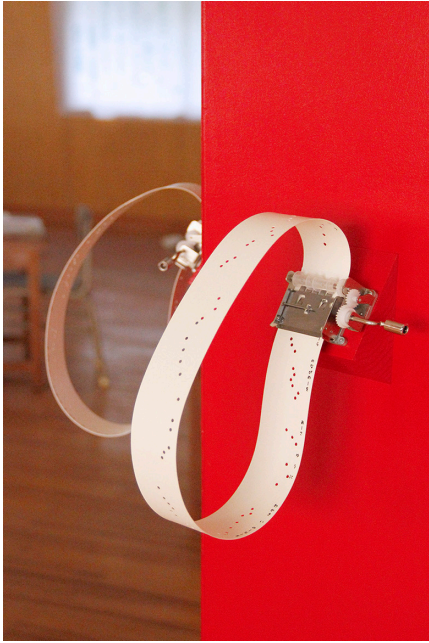


図8 谷本 研《大月町旧小学校校歌十四窓 — 廃校オルゴール —》
(オルゴール)



図9 谷本 研《大月町旧小学校校歌十四窓 — 廃校オルゴール —》
(ノート)

4.2 作品を通じて得た知見への可能性

2つの作品制作と発表を通じて、以下のような知見への可能性が得られた。

「やんばる旧小学校々歌八景」

- ・校歌には海や山河のほか、「鎮守森」や「霊峰」といった沖縄ならではの信仰を感じる景観がうたわれる。
- ・校歌が制定されたのは戦前の1928年から戦後の1972年までばらつきがある。
- ・当該校の校長や地域の識者が作詞に関わったり、音楽教師が作曲を担当する例がみられる。
- ・8校のうち3校の校歌の作曲者同士には交流があり、終戦翌年の1946年、米軍基地でおこなわれた洋楽演奏会で揃って合奏していたことが判明する。米軍に統治された歴史を持つ沖縄ならではのエピソードといえる。
- ・沖縄には、校歌にあわせて旗を持って踊る「校歌遊戯（校歌ダンス）」という慣習があり、昭和初期の校歌制定と同時に振り付けが作られた例がみられる。

「大月町旧小学校校歌十四窓 — 廃校オルゴール —」

- ・校歌には海や山河のほか、「さんご」や「黒潮」、「漁船」といった地域ならではの風土がうたわれる。
- ・校歌が制定されたのは1950年代が4校、1960年代が1校、1970年代が2校、1980年代が2校、とばらつきがあるが、年代不明の5校をのぞいて全て戦後である。会場へ訪れた鑑賞者の中には、自身の在学中には校歌がなく、息子や娘の在学中にPTA活動などを通じて校歌を覚えたという年配の方も多くいた。
- ・14校のうち7校の校歌が、郷土の歌人・増岡正章という人物による作詞である。
- ・鑑賞者の情報から、ある小学校の校歌のメロディが、隣り町である宿毛市の小学校のそれと同一であることが判明する（経緯は不明）。
- ・一切小学校の校歌の歌詞にある「いさき（青桐）」が一切という地名の由来であることや、それが繊維利用のために豊後水道沿岸各地で広く栽培された植物であることなどを知る。

このように校歌を紐解くことから、それぞれの地域の風土だけでなく、歴史性やそこで活動する人々の横顔も垣間見えてきた。

4.3 “観光”的視線が誘発する郷土へのまなざし

両フェスティバルの展示会場には多くの地域住民が訪れ、自らの

母校だけでなく、近隣の他の小学校の校歌の歌詞を味わったり、それぞれのオルゴールを鳴らしてメロディを楽しむ様子を見ることができた。そして、それらの小学校が、自分の友人や配偶者の出身校、あるいは教員としての勤務校であったということを私に教えてくださったりした。さらにその場で、そのご本人に電話をかけ、互いの小学校の思い出話が交わされるという例もみられた。

こういったことから、同じ地域の住民でも、通常、母校以外の校歌に触れる機会は少ないということに改めて気付いた。そして、他所からやってきたアーティストの“観光”的視線が、地元の人たちにとっても郷土に対する新鮮なまなごしを誘発する効果があることを実感した。

文化人類学や民俗学のフィールドワークにおいて、過去に撮影された写真や映像を調査対象者に見せながら話すことによって、記憶や感情を引き出す「エリシテーション」という方法論があるが、それに似た機能の魅力をも有する作品展開の可能性も感じることができた。

5. まとめと今後の展開の可能性

廃校の増加は辺縁地域に限った問題ではない。例えば京都市などの都心部でも人口のドーナツ化現象を受けて多くの小学校が廃校になっている〔註4〕。本稿の前半でも触れたように、廃校の有効活用は全国各地における喫緊の課題であるといえる。

そして、廃校にともなって草の根の郷土イメージをうたう校歌が消えゆくようにしている。統廃合によって新設された学校では、複数の地域から集まる生徒たちにとって、誰に対しても偏りのない内容とするために、より抽象的で均質的な歌詞の校歌が新たに作られることになる。これは市町村合併によって地名が消失したり、合成地名の創出によって歴史の記憶が薄められることと同質の問題をはらんでいる。

私は、アーティストが地域活性化を目指した活動をすべきと考えているわけではない。各地のフェスティバルに多くのアーティストが動員される現状において、たいていの場合、他所者の立場になることを自覚的に捉えたい。そして、かつて特に少年たちが、遠方各地へ到達したことの証明として、観光ペナントを持ち帰って無邪気に自慢したのと同じように、今後も機会があれば、廃校を会場に含む各地のフェスティバルに率先的に参加して、単なる“観光”ではみえない郷土の魅力に触れることを是とした。廃校の増加をとめることはできないにしても、アーティストの純粋な表現欲や到達欲が、そのままでは消えてしまうような地域の小さな記憶を拾い上げ、世界の均質化を食い止める力をもつと信じている。

- [註1] 文部科学省. 令和3年度 公立小中学校等における廃校施設及び余裕教室の活用状況について. (https://www.mext.go.jp/content/20220331_mxt_sisetujo-000021567_1.pdf) 2023年1月12日閲覧
- [註2] 「当世物見遊山」展（お宿吉水／京都）。筆者が1999年に企画した展覧会。当時自身が住み込みで働いていた円山公園の高台の古旅館を舞台に7名のアーティストの作品を展示した。
- [註3] 谷本研『Pennant Japan』（PARCO出版、2004）
- [註4] 京都市では早くから廃校の活用が進められ、こどもみらい館（1999年開館。元竹間小学校）や京都芸術センター（2000年開館。元明倫小学校）、京都国際マンガミュージアム（2006年開館。元龍池小学校）など多様な施設として整備し、文化芸術都市としてのブランディングに繋がっている。